

論語の精神 子どもたちに



元教諭の新田さん、札幌で「寺子屋」開塾

論語の精神を子どもたちに伝えようと、元北海高校の英語教諭、新田修さん(66)が、「寺子屋・こども論語塾」を開塾した。40年間の教員生活で、いじめや学級崩壊などの問題に接し、改めて論語の教える規範意識や思いやりの心を育む必要性を痛感したという。新田さんは「論語を読むことで言葉が体に染みつき、年を取るにつれ、必ず人生に生きていく」と話す。

(古賀大己)

札幌市北区の北大寺に、塾生の幼稚園児や小学生ら25人と、その保護者計50人が集まった。20〜30分の座禅で心を落ち着かせた後、論語を読み始める。「子のたまわく……」。子どもたちの大きな声が本堂に響き渡る。

論語は、孔子と弟子の問答からなる。新田さんは専門書を読みながら独学し、お手製の現代語訳も作った。子どもたちにも分かりやすい説明を心がける。

新田さんは、英語教諭として40年間、北海高校に勤めた。弁論部顧問や生徒指導などを担当した。なくならないいじめや学級崩壊、児童虐待など

師弟の信頼「理想的な教育の姿」

どの問題に心を痛めた。一方で「問題があっても、生徒との対話を選べる先生も増えている」との思いもあった。

ある日、弁論部の生徒に「論語って何？」と聞かれたことがあった。そして改めて論語と向き合った。孔子の説く思いやりの心や、親子、師弟の規範意識。孔子は弟子の問いに、弟子の個性を踏まえながら的確に答える。「信頼関係を支えられた師弟に、理想的な教育の姿を見た」

いつしか論語塾を開きたいと思うようになり、2007年の定年を機に、東京の論語塾を見学、教員時代の教え子らと開塾準備を進めた。北大寺の協力を得て昨年12月に塾を始めた。

「今は論語を読んでも、言葉の意味は分からないだろう。しかし、言葉は心に長くともまり続ける。子どもたちは人生を歩むにつれ、言葉を反芻し、自ら意味を見いだすに違いない。論語の心を伝えることに残りの人生を使いたい」と新田さん。

参加費は一族500円。毎月第3土曜日に北大寺で。問い合わせは世話人会代表・高島篤さん(090・1385・6089)へ。

論語を読む塾生たちと、新田修さん

札幌市北区

ほっかいどい